

禅の友

Zen no Tomo

3

March 2025





ご本山だより 大本山永平寺【上山前日】

じょうざん

大本山永平寺
福井県吉田郡
〇七七六・六三・三一〇二



二月から始まった新到和尚（新しく上山する修行僧）の上山は三月末まで続きます。およそ一週間に一回設定された上山日に合わせ、全国から新たに永平寺に入る修行僧が門前町に集まってきました。師匠やその上の代から何代にもわたってお世話になっていく宿に前泊するのがほとんどです。上山日が翌日にせまり、緊張で食事が喉を通らない人もいるそうです。不安や心配で眠れずに夜が明けてしまうことも多いでしょう。

一夜が明け、身支度を調えいよいよ出発です。見送りに来た人々に挨拶をし、一人もくもくと門前町を歩く修行僧の姿はこの時期の風物詩といっているでしょう。彼らが向かうのは地蔵院という寺院です。地蔵院は永平寺唯一の塔頭（寺院の中にある小寺）です。門前町の坂を登り切り、いよいよ地蔵院に到着するというところに、案内役の先輩和尚が立っています。はじめ

て接する永平寺の僧侶です。「この人たちに指導をうけるのだな」とさぞ緊張することでしょう。先輩和尚の指示のとおり道を進み、地蔵院の入口に到ります。

到着版という木の板を叩くと、それを合図に正面の戸が開き、中からまた別の指導役の先輩和尚が出てきます。その先輩に対し、師匠のお寺の名前と自らの名前を名乗らなければなりません。

しかし、何度も練習をしたのにもかかわらず、言葉を忘れてたり口がうまく回らなくなったりすることもあります。筆者はこの時、緊張とともに気持ちが高ぶっているせいか武者震いをしていたこと覚えています。

こうして地蔵院に入った新到和尚たちは、体調の確認や持ち物の点検、永平寺での基本的な作法の確認を一晚かけて行います。そして翌朝、いよいよ山門に立つのです。



ご本山だより 大本山總持寺【春の息吹】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一



新しい年を迎え早々、猛烈な寒波が到来し思ってもみなかったドカ雪が猛威を振るつた冬でした。お彼岸を迎える三月にはまだ墓地には残雪があり、墓参りさえ困難な所もあるかと思えます。

それでも「暑さ寒さも彼岸まで」と言われますように徐々に春の息吹が感じられるようになりました。現在總持寺では新しい修行僧が上山してきています。

これまで学生や社会人として様々な生活スタイルを過ごしてきた彼らではありますが、ひとたび本山に入つたなら全く今までとは違った衣食住となります。僧堂そうどうに起居して和合の精神で一心に修行に励むのです。

總持寺開山瑩山えいざん禪師ぜんじさまの教えの中に、私たち仏道修行者に対してその歩むべき道は山のように登ってみると益益高く、仏祖のお徳は接してみれば

益益深いものであり、それは終着点のない仏道修行への厳しさをお示されているのです。「行・住・坐・臥」を日々丁寧に、修行に勤しんでいくことが仏さまのこころとかたちに調ととのえられていくことなのです。

さて、今年には能登半島地震から一年、そして東日本大震災より十四年目となります。

元日に大祖堂だいそどうにて能登半島地震一周忌の追善供養を行い、地元石川県では一月五日に羽咋はよくいの永光寺にて追悼法要を行いました。

三月十一日は大祖堂で石附禪師さま大導師にて被災物故者慰霊法要を厳肅にお勤め致します。

尚、三宝殿近くの高台に鎮座します「平成の救世観音」と共に私たちは全ての震災や震災犠牲者の慰霊と復興をいつも願い祈り続けております。

選・坊城俊樹

ランタナの赤差し色に冬の街

山口県 稲村 みどり

評「ランタナ」は可愛いピンク色が特徴で近年いろいろなところで見かける。かなり広がりやすいのだろう。しかし殺伐とした冬の都会では唯一の色彩なのかも。「町」ではなくて都市部の「街」という漢字を使ったところに句が的確に表現された。

薄氷の真下を草の息通す

岩手県 鈴木道昭

評 薄く広がった氷は道ばたや庭のあちこちにある。良く見ると透明な氷の下にいくつかの気泡が見られたのであろう。それが氷の真下を連なっただどこかに流れてゆくようである。あたかも氷に閉じ込められた草たちのせつない息の連なりのように感じた。

◆ 春の風邪鼻にかかるはかへり言 北海道 堺 隆

◆ 一輪の梅を採して切通し 埼玉県 新藤 共子

◆ 手すさびというて大工の注連作 山口県 御江 恭子

◆ 点筆を染め申さずに年の暮 千葉県 野中 修次

◆ 晩秋やたしかここだと衣裳箱 三重県 西村 廣視

◆ 生涯を細かく生きて木の葉髪 鳥根県 金山 陽

◆ 極月のピアス金色耳熱し 長野県 森山 昌子

◆ 花芒ここより日野へ道岐れ 鳥取県 徳本 義則

◆ 冬晴や真紅しただるピラカンサ 東京都 松本 キ又

◆ 着ぶくれて感性論の何処へやら 鳥根県 藤江 堯

選者吟

薄氷の死魚を孕みてをりにけり 俊樹

作句小見 「薄氷・うすらい」は春になつても張る薄々とした氷のこと。そこには既に死した冷たい魚が閉じ込められている。しかしよいよ春ともなればその死は氷が溶けてやっと解放されるのである。それが故に命が再び誕生するのではないかと。

選・長澤 ちづ

丘に立ち子らと見上げる大空に初東雲の
光の豊かさ

鳥取県 眞山 博充

評 初春に相応しい清々しい淑気を感じさせる一首。

「子ら」と共にであるところ、大空を見渡せる丘であるところ、光を「かげ」と読ませたところ、みな大らかにまとめられ、この一年の幸いを願う祈りに満ちている。

銀色の山里の景に朝陽射す無彩の暮らし
にふと湧く望み

秋田県 小松 紀子

評 雪に覆われた無彩色の景色に差し込む朝陽のかがやきを「ふと湧く望み」と、閉ざされた雪国の暮らしの、精神的な色取りにした点が巧みである。

雪に覆われた無彩色の景色に差し込む朝陽のかがやきを「ふと湧く望み」と、閉ざされた雪国の暮らしの、精神的な色取りにした点が巧みである。

◆ 真冬日の続くも冬至待ち遠し伸びゆく日脚が何よりうれし
北海道 加藤 智子

◆ 一生にて華やぐ時代は二十年と母百歳の頃の言葉よ
静岡県 杉原 民子

◆ 御舟入と皇族は舟にて旅立たる夫は脚絆に陸路をゆきし
茨城県 田口 昭子

◆ 年の瀬や亡母の形見の割烹着掛けて二人でお節をつくり
宮城県 阿部 澄江

◆ わが骨を埋める場所と教えつつ孫たちと墓をねんごろに掃く
鳥取県 徳本 義則

◆ 歩きつつ背後に足音近づきてやつと会えたと友はすがれり
愛知県 深谷 ハネ子

◆ 娘の家の小さな池の太き鯉大きな池に貰われてゆく
山口県 濱田 道子

◆ 新築に引越すでに二十年一度もせぬが障子の張り替え
奈良県 鈴木 重雄

◆ 兄逝きて伽藍に響く修証義に声を重ねて心を鎮む
千葉県 富野 光太郎

◆ この道を幾度通ってふるさとへ父母なき今も実家へ向かう
京都府 三浦 大示

選者詠

幾通りも漢字当てられ愛されてヤモリ代々

小宇宙に生く

ちづ

作歌小見

ヤモリは「守宮」「家守」などとも書きますが、「壁虎」とも書くようです。あんな小さな生きものを虎に喩えるなんて「強く生きよ」といつているようではありませんか。家の一隅に行動範囲せまく生息している気配も愛おしいですね。